Emily Brontë の研究

― 女の執念 ―

宮　川　下　枝

Emily Brontë に対する私の興味は随分長い間続いていて，毎年いろいろな角度から彼女を眺め続けて来た。今年も又アングルを変えて彼女を描いてみたいのである。豊田博士の序文の中にも「嵐ケ丘」には女の執念が熠となって燃えているとあるが，随所に溢れる女ごころは私に深い興味をそゝり，私を捉えて離さない。一見強い女性に見えるエミリーの内にもくずをれるよえなたおやかな弱さもあれば，又多彩な感覚，深い思いやりも見られる。嫉妬，憎悪女としての醜くさが隠されているかと思う反面何ものを恐れることのない徹底した愛の姿，毅然とした決断力，千変万化の女ごころのさまを見せてくれるのである。そしてこの女ごころを通して彼女が考え構想した愛の姿について研究してみたいと思うのである。

こうした女ごころを通して見る愛の諸相は次の三段階に分類していゝと思う。

1．愛の無自覚

2．愛の自覚

3．愛の完成

そして又これは一人の人間の成長から見れば愛を意識せずに過してしまう時期，次に愛を自覚する時期，そして最後に愛の完成に到る時期。

1．Puberty（思春期）

2．Adolescence（青年期）

3．Maturity（成熟期）

と考えてもよいと思うのである。Puberty については Judith O'neill に於いても次のように述べられている。

She fails to see that her entrance into puberty requires a radical change in her relation with Heathcliff, and cannot understand his behaviour after her return to Wuthering Heights. Her attitude towards him remains as it was before puberty, but he recoils "with angry suspicion from her girlish caresses".

エミリーの構想に於いて斬新な点はこの三つの成長期を一人の人間に於いて見極わめようとせず，各時期をそれぞれ異なる人物に代表させて一つの愛の姿の完成を見ようとした処である。

そして，この愛の完成に到る迄の過程のうちに愛の諸様想を描くにあたって如何なる微々たる面をも見落すことなく捉えていることは，エミリーの細い観察力，鋭い洞察力を示している。

1．Puberty（思春期）— 愛の無自覚

この時代は少年少女のまゝの子供時代とは異って急に不思議な感情を異性に感じ始める時期である。一つ屋根の下に育ち子供時代を過した Heathcliff, Cotherine も異例ではなくこの複雑な感情を経験し，而もそれが愛の芽生えであるとの自覚のないところに人間の悲劇の種を芽ぐんでいる。

語り手である Nelly はキヤサリンが Thrushcross Grange から帰って来た折の二人の少年少女の様子を次のように物語っている。

She looked round for Heathcliff... Heathcliff was hard to discover. at first. If he were careless, and uncared for, before Catherine's absence, he had been ten times more so, since. (Chapter XII)

急に美しくなり素晴しく装って意気揚々と帰って来たキヤサリンはなつかしい嵐ケ丘の我が家の中に遊び仲間のヒースクリフの姿を求めるが彼はなかなか見つからない。今は彼のことを気にしている者は家の中には彼女以外は誰もいない。きれいになったキヤサリンに家中の注意は向けられている。

"Shake hands, Heathcliff," said Mr. Earnshaw, condescendingly; "Once in a way, that is permitted."

"I shall not," replied the boy, finding his tongue at last; "I shall not stand to be laughed at. I shall not bear it!"

And he would have broken from the circle, but Miss Cathy seized him again. (Chapter VII)

「たまには握手位してもいゝよ。」と寛大な Earnshaw 氏に「嫌だ，笑いものになんかされるのはたまらない。」と少年はやっと答える。

逃げ出したい気持の彼の手を摑まえるキヤサリンも，まだこうした大人の感情の芽生えには気が付かないし，二人の少年少女の気持を洞察してやる余裕とかはアンシヨーにも全々ないのである。

"Come-- are you coming?" I continued. "There's a little cake for each of you, nearly enough; and you'll need half an hour's donning. I waited five minutes. but getting no answer, left him.

(Chapter VII)

だがこの小さな感情のきざしをも見逃さないのがネリーであれば，作者はさしづめこの場合はネリーの姿をとっていることになろう。このような感情を粗末に扱っては大変なことになるとやきもきしているネリーは「おいで，二人に小さなケーキが一つづつとってあるから持って行っておやり。三十分喋っておいで」とすゝめてやる。少年は返事もしないでいる。作者にはよく分っているこの重要な瞬間も，少年自身には理解されていない。もどかしさがネリーの言葉動作の中によく現れている。内なる自分を見抜かせてやりたい。ネリーは更に彼に忠告する。

"Yes: you had the reason of going to bed with a proud heart and an empty stomach," said I "Proud people breed sorrows for themselves..."

(Chapter VII)

「そんな傲慢な思いだけでお腹もすかして寝てしまうと後で後悔するよ」とネリーは愛には謙虚なおもいが必要であり，おもいやりがない場合には成功するものでないことをちゃんと見通しているのである。こうしてやさしい思いやり，女心にあふれた感情もエミリーの一面である。だがこの思いやりのなさと愛しているのだと感づかないことは却って少年を反撥的にして，キヤサリンからやさしい言葉をかけられゝば反対に腹立たしく振舞う。キヤサリンもそうした態度が愛のうらはらの表現であると理解出来る程には大人になっていない。愛の幼さ。これはエミリーもつくづくと残念がっているところである。

Catherine and he were constant companions still at his seasons of respite from labours; but he had ceased to express his fondness for her in words, and recoiled with angry suspicion from her girlish caresses, as if conscious there could be no gratification in lavishing such marks of affection on him. (Chapter VIII)

「君が好きだよ」等と無邪気に云えなくなってしまった少年ヒースクリフの様子はうまく描かれている。

この少年少女時代の愛を描く過程に於いて頭初にも述べた如く作者エミリーの女心の現われが随所に見受けられるものを暫く追ってみたい，様々の愛の技巧というべきか，エミリーも確かに女である。

Ⓐ 泣きの一手

Her eyes began to glisten, and her lids to twinkle. "And you told a deliberate untruth!" he said.

"I didn't!" she cried, recovering her speech; "I'll cry myself sick!" "I did nothing deliberately. Well, go, if you please-- get away! And now I'll cry myself sick!"

She dropped down on her knees by a chair, and set to weeping in serious earnest. Edgar in his resolution as far as the court; there he lingered. (Chapter VIII)

感情を上手に表現すべき術を知らぬヒースクリフからキヤサリンの心は次第に離れて，暫くの滞在をした Linton 家からの育ちよい青年の訪門は彼女には好ましいものに思えて来る。この Edgar Linton が遊びに来ている時のことであるが，I'll cry myself sick! と，もう帰ろうとする彼に「病気になる迄泣いちゃうから。」と椅子の側に膝を折って座りこみ「帰えらないで」と止める場面がある。in her serious earnestが面白い。日本語で云えばよゝと泣きくずれるとでも云う言葉であろう。構えて泣く処，隅におけない少女である。女の泣くのには弱いのはエドガーだけではない。世の一般の男性の常であろうが，彼も又どうしていゝか分らない，もう帰へる積りで腰を浮かせていた処をどうしようと戸惑いつゝ馬小屋のあたり迄行ったものゝ，そこに佗ずんでしまう。如何にもうまい男心の捉え方であってエミリーがこうした微妙な感情，人間の心のあり方を心得ているかは彼女が Celibacy を守った女性であるだけに驚嘆に値するもほである。

万葉の歌に

夕闇は道たずたずし月待ちて

いませ我がせこその間にも見ん

別れを惜しむ万葉の女性と泣くことを宣言し乍ら泣きくずれようと身構えるキヤサリンと如何にも興味深い対照である。

だがその技巧の面白さは章を追っていくに従って更に展開される。こうした人間の感情を巧に捉えている。Shakespeare も同じような手を用いているが次にあるのは

Ⓑ 邪 魔

である。愛情というものは何の邪魔も入らずに smooth に運べば，却って燃え上らぬものであるが，何等かの障害は当事者たちの感情を激しくかきたてる。シエクスピアも Tempest に於いて Prospero は娘 Miranda と流されて来た王子 Ferdinand の

恋の成立の為には却って隠れては邪魔を試みるのであるが，エミリーに於いてもこの邪魔という手の使い方もなかなか巧妙で興味深い。これも青年リントンが遊びに来ている折のことであるが

Intelligence of Mr. Hindley's arrival drove Linton speedily to his horse, and Catherine to her chamber. (Chapter VIII)

兄 Hindley が帰って来たことが分ると訪門中のリントンは急いで馬のいる方へかけてしまうし，キヤサリンも自分の部屋の中にとびこんでしまう。

Mr. Hindley had given me directions to make a third party in any private visits Linton chose to pay. (Chapter VIII)

自分の妹の処にリントンが一人で訪門して来る時には妹の部屋に居る場合，必らず第三者として立ち合うようにとヒンドリンはネリーに厳命している。これは礼儀，作法としても大切なことで外国の家庭での躾であるときかされたものであるが，何れにせよ常々ネリーが側に居ることは邪魔で仕方がない，だがこの邪魔は却ってキヤサリン，リントンの思いを進行させてしまう。このあたりも愛の機微を見逃さない箇所である。かくしてキヤサリン自身も深く心の底に潜む愛の真実は自覚し得ないまゝに，ヒースクリフも前述のように，彼女からやさしい言葉をかけられることすら嫌らって彼女より更に自分の愛を見抜く術もなしに過すまゝに，キヤサリンは急激にリントンに心惹かれて求婚に応じてしまう結果になる。

And he will be rich, and I shall like to be the greatest woman in the neighborhood. (Chapter IX)

彼は金持だし私は近所でも偉い人になれるのだからと表面的な理由から与えた結婚の承諾であるが，キヤサリンがヒースクリフの愛を自覚しないまゝリントンとの結婚を決意するに至ったことはこの物語の悲劇の発端となるわけである。

だがそれは別として男に求婚された場合の女の歓喜，そうしたものが手をとるように見えるのも興味深い。有名な箇所であるが求婚されたことをネリーに打ちあける場面を拾っておこう。溢れるよろこびとはこのことだろう，心にくい迄に女心を把域しているエミリーではないか。

It would degrade me to marry Heathcliff now; so he shall never know I love him. (Chapter IX)

私がヒースクリフを愛していることは彼は知らないが，私の気持はそっとして，彼とは結婚しないのだと，

この有名なせりふを残して彼女は結婚に踏み切ってしまう。自分自身への云い訳であろうが,表面的な歓喜に浸っている彼女には，それが如何に重大な決断を意味するものであるかは理解されていない。

又彼女のこのせりふを半分迄ぬすみ聞きしたヒースクリフも真相を正す努力もしないまゝ，この言葉をきくと愕然として立ち去ってしまう。このあたり如何にも愛の幼さが感じられてネリーの切歯挟腕もどうしようもない達し得ないもので説得力もなく，彼女の努力も空しく二人は離れ離れになってしまう。そしてキヤサリンは新しい生活に入るのである。そして彼女の望みは如何にもありふれた女らしくそのあたりで大立物の婦人になりたいことである。

and I shall like to be the greatest woman of the neighborhood.
(Chapter IX)

Nelly, I am Heathcliff! He's always, always in my mind: not as a pleasure any more than I am always a pleasure to myself, but as my own being. So, don't talk of our separation again: (Chapter IX)

「ネリー，ヒースクリフと私は一心同体よ，喜びも悲しみも皆分るのだから離れること等考えないで，離れるなんてことはあり得いわ」とキヤサリンは考えているが，自分だけは相手を愛しこんでいるから充分なのだと思っている自己満足，謙虚に自分の思いを相手に分らせようとする努力の足りなさ，これは前述のようにヒースクリフとて同様で，子供時代からは脱皮して恋を感じつゝもこれが愛だとは理解し得ず，又各々自分の思いを相手に伝えようとの努力もしないまゝ他は相手を誤解したまゝ立ち去って，こゝに取り戻しのつかぬ失敗の原因をつくったまゝ第一の思春期の時代は終る。

げに悔多き時代である。

さてキヤサリンが金持のリントン家の若夫婦となる処からを第二段階として考えて見よう。

2. Adolescence (青年期) — 愛の自覚

I got Miss Catherine and myself to Thrushcross Grange; and, to my agreeable disappointment. (Chapter X)

この agreeable disappointment という言葉が興味深い，ネリーはお嫁に行く Cathy について Thrushcross Grange に一緒にいく，案外に二人は仲がよかったという処で，愛のない結婚がうまくいく筈はないと信じているネリーにとって案外裏切られたような思いであり自分の信念のゆらぎを見せられてがっかりしているところが

面白い。だが勿論新婚の二人が仲がよいことは，手塩にかけて育てて来たキヤサリンの新家庭であるだけに嬉しいことには違いない。agreeable disappointment 味のある語ではないか。女の気持の復雑さの現れだ。

さてこゝでエミリーが如何に愛の奥義を知っているかということは居なくなったヒースクリフを又立ち帰えらせる処である。ヒースクリフが居なくなって始めてキヤサリンは自分の彼に抱いていた愛の大きさに驚き，雨の中をびしょ濡れになり乍ら泣きつゝ空しく探すのであるが，如何にこの悲しみ嘆きが大きくともヒースクリフが蒸発したままであっては彼女の悲しみも年月を重ねるうちには自然と消えてなくなっていくことであろう。何処えともなく立ち去ったヒースクリフは，To be absent and silent for three years. 三年間の消息不明のあと忽然と帰って来る。一度立ち去ったと思う愛が再び手のとゞく処へ戻るということは愛の再燃することであってキヤサリンの心には激しい火が燃えつけられる。

On a mellow evening in September, I was coming from the garden with a heavy basket of apples which I had been gathering. It had got dusk, and the moon looked over the high wall of the court. ...when I heard a voice behind me say--

"Nelly, is that you?" ....You do not know me? Look, I'm not a stranger. I remembered the eyes. (Chapter X)

文そのものも成熟した美しさがある，帰って来た人の声がきこえるようなうまみである。先づ声から彼の帰へりを読者に知らせる等心憎い手法である。秋も深まった宵を果樹園から一杯摘んで来た林檎のかご，それをドッカリと下ろして宵やみの薄暗さの中に休憩するネリーの背後からきこえるなつかしい聞き覚えのある声，如何にも美しい文の紹介で始るヒースクリフの帰還ではあるが，ヒースクリフは決して甘い気分で帰ってはいない。

I want to have a word with her-- your mistress. (Chapter X)

奥さまとたった一言交わしたくて帰って来たのだとネリーに云う処の必死の気持で帰って来たのである。そして帰って来る以上，冷たい言葉をかけられたり逢わないとでも云われようものなら自殺する覚悟で帰って来ているのである。再会するからには決死の覚悟の男らしさがうかがえる，フラリと帰って来るような生やさしいものではない。doing the execution of myself.

この三年間の留守をして帰って来る決心をしたヒースクリフにしても離れてみて，三年間という時をおいて始めて自分の彼女に対する彼の愛の深さを知り愛の自覚に到

達した訳であったことがこの短い会話の言葉の中に充分に察しられる。

He retained a great deal of the reserve for which his boyhood was remarkable; and that served to repress all startling demonstrations of feeling. (Chapter X)

ヒースクリフは少年時代からのくせのついた遠慮深さから完全に抜け切れず自由に思いいのまゝには述べられないのであろうが。一方キヤサリンはこの思いがけぬヒースクリリフとの再会に余りの歓喜に心も乱れ興奮してしまう。

But the lady's glowed with another feeling when her friend appeared at the door: she sprang forward, took both his hands, and led him to Linton; ..Now fully revealed by the fire and candlelight, I was amazed, more than ever, to behold the transformation of Heathcliff. He had grown a tall, athletic, well-formed man; ...His countenance was much older in expression and decision of feature than Mr. Linton's; it looked intelligent, and retained no marks of former degradation.. his manner was even dignified: (Chapter X)

そしてヒースクリフの手をとると夫リントンの許に彼を連れていく。暖炉の火とろうそくの火に照し出されたヒースクリフは今や全容を表わしその彼の変化に唯々彼女は驚いてしまう。

がっちりした背の高い逞しい男になり決断力のある顔立ちとなり表情豊かになり賢しこそうな顔付きになっている。態度，動作も立派だ。

He took a seat opposite Catherine, who kept her gaze fixed on him as if she feared he would vanish... but it flashed back, each time more confidently, the undisguised delight he drank from hers. (Chapter X)

彼は若夫婦の面前に腰を下し，又もヒースクリフが消えてしまうのではなかろうかと心配しつゝじっと見つめているキヤサリンを偽りのない喜びで眺めている。

the transformation of Heathcliff とあるだけで外的条件は何一つ描かれていない。三年間の留守の間彼が何処へ行きどのような勉強をして来て変化したのか等ということは記されていない。

エミリーの強調する愛の幼さ，その愛の幼さ故に本当に愛していることを自覚出来なかったキヤサリンはヒースクリフがこのような立派な人間になると見抜くことは出来なかった。そしてこの彼が立派になって帰って来た時その外的条件が何一つ描かれていないのは，次のように解決してもよいのではないだろうか。愛の自覚のない時は

ヒースクリフの真の姿，本当の価値を見出すことの出来なかったキヤサリンが今始めて心の眼が開けて眼の前にいるヒースクリフの立派さが理解出来たのであると，外的条件の変化の必要性などはないものであると考えてよいのだということを示している。不在中の状況が報ぜられないのはその為であろう。

さておき，この立派なヒースクリフを眼前に見，嬉しさと同時にしまったという感じ，この未完成に終った愛を完成させなければならないと作者は意図しても，既に結婚してしまった二人の夫妻は当時の道徳観に従えばどうすることも出来ない。これを別の人達によって完成させようとするのは如何にも今日のオムニバス式の物語の続け方も連想させられてこの新しい手法は楽しみを与えてくれる。

また別の角度から彼女の描く愛の姿を追ってみたい。

勝ち誇った女の自信

自分に逢う為にわざわざ苦しい辛い目に耐え自分の声を一声きく為にだけ苦労して帰って来て呉れたヒースクリフの存在を確認すると，キヤサリンは歓喜に震える誇らしげな女性である。

I've fought a bitter life since I last heard your voice; and you must forgive me, for I struggled only for you!　(Chapter X)

今や相手の愛を確認し自分の愛をも自覚した勝ち誇る自信に溢れたキヤサリンは自分の義妹に対しては意地の悪い姉となる。

Here are two people sadly in need of a third to thaw the ice between them; and you are the very one we should both of us choose. Heathcliff, I'm proud to show you, at last, somebody that dotes on *you more than myself. I feel you to feel flattered.* (Chapter X)

ヒースクリフに夢中に憧れているリントンの妹の思いを見抜くと世間知らずのこの良家のお嬢さん育ちの義妹をヒースクリフに紹介し「私よりあなたに夢中になっている人が居るのですよ」等と嫌がる義妹を彼の前に引張り出し「二人の女性から思われていゝ御気分でしょう。」等と女の意地悪まる出しである。とげと悪意に満ちたその言葉に傷つけられたイザベラは身をよじってもがきつゝ真赤になったり真蒼になったりして嫌がるのに掴えた手を離さずにその手に自分の爪をたてゝ「ほらこゝに虎が…」と迄の悪口である。

更に続けて

I like her too well, my dear Heathcliff, to let you absolutely seize and devour her up."　(Chapter X)

と云うに到ってはその自信の程もあくど過ぎる。「彼女を摑えて食べて頂戴」たとえ相手の愛を確認しても又こゝ迄の惚れは別の意味での危険性を伴う。エミリーはこゝでヒースクリフの言葉をもって充分に警告をしている。

But what did you mean by teasing the creature in that manner, Cathy? You were not speaking the truth, were you? (Chapter X)

「君本気でそんなことを云ってあの子をからかっているんじゃないだろう」とは愛の勝利に有頂点になるものえのどんでんがへりを食わない為の警告としてきゝたい。又この言葉の中にはやっと自分達の愛を自覚した時には既に他と結婚しているキヤサリンにはもうどうにもならないという自放自棄の気持になり兼ねない彼女えのいたわりのひびきもある。

"seek no revenge on you," replied Heathcliff less vehemently. ..you are welcome to torture me death for your amusement, only allow me to amuse myself a little in the same style, and refrain from insult as much as you are able. (Chapter XI)

「君がそれで楽しいのなら僕を死ぬ程いぢめてもいゝけど，僕だってお前をいぢめて楽しむからいゝけど，君自分で自分をいぢめちゃいけないよ」

Seek no revenge Seek no revenge on yourself. (Chapter XI)

義妹をいぢめ抜く勝ち誇ったかに見えるキヤサリンの態度は自放自棄の変貌であることを見通すだけのけい眼をもったヒースクリフは「お腹にもないことを云ってはならない」といましめている。嘘はエミリーの嫌う処である。また and refrain from insult as much as you are able. この言葉は，相手に屈辱的な態度をとらせまいとする思いやりの言葉と受け取れる。

If I imagined you really wished me to marry Isabella, I'd cut my throat!" (Chapter XI)

「だが君が本当に僕とイザベラを結婚させたいなんて思っているのだったら僕は喉かき切って死んでしまう。」ヒースクリフの言葉には一片の甘さもないのだが，生命をかけた愛の激しさは十二分に味いうがかえるのである。

さてもう一つこのあたりで面白いと思ったのは夫エドガー・リントンの態度であった。

"Catherine, unless we are to have cold tea, please to come the table," interrupted Linton, striving to preserve his ordinary tone, and a due measure of politeness. (Chapter X)

「お茶がさめてしまうから，キヤサリン，どうか食卓へ来て下さい。」と出来るだけ声の

調子を荒らだてないように出来るだけ丁寧に礼儀正しく話しかけている。エミリーの文章にはあとは何の説明もないのであるが，妻の昔の恋人が突然姿をあらわし平和だった家庭の中に訪れたこの突発事件に彼は気もそゞろでない。表面は飽く迄も冷静丁寧だが腹立しさを精一杯に抑えている様子がうかがえ，嫉妬を感じた苛立つている男の馬鹿丁寧な様子がうかがえる。

これも愛の機微をつく興味津々たる箇所である。

3．Maturity（成熟期）― 愛の完成

未完に終ったキヤサリン，ヒースクリフの愛は別の人物の姿を借りて完結に到る。世には愛し合っていることをやっと認め合った時には自分達は既に無自覚のまゝに他の第三者と結婚してしまっていて，自分達の既成の家庭をこわすわけにもゆかず，その子供同志を結婚させて果せなかった我が夢を完結させるという例もあろう。だがエミリーの場合そのような話の筋を説定はしなかった。話は第二世達に移るが今は既にこの世を去ったキヤサリンの娘キヤシイはヒースクリフの息子リントンと無理矢理に結婚させられるがこれは決して愛のある結婚ではない。だがヒースクリフがリントンを無理矢理にキヤシイと結婚させる過程には又々興味深い愛の姿の一面をかいま見ることが出来るのでその方を少し観察してみたい。ヒースクリフとエドガーリントンの妹イザベラの間に出来たヒースクリフ第二世リントンはひ弱な少年で何ら男らしい魅力を供えていない。この弱々しい少年リントンを是が非でもキヤシイに結ばせようとあらゆる手段を敢えて惜しまぬヒースクリフの腹の中には果して何があるのであろうか。リントン家の財産横領だけではないようである。矢張りこれには否むことの出来ない自分達の未完に終った愛の完成を二世の姿の中に待つというような願望が感じられる。あの執ような迄の誘い出し方。手練手管。彼の誘い出し方のうまさ。それにひきかえ唯ヒースクリフに操られるだけの人形的存在のリントンの魅力のなさ。

父エドガーから嵐ケ丘だけには近づかぬよう細心の注意のもとに育てられたキヤシイも，年頃になれば何か血のひくものにおびきよせられて，ネリーの止めるのもきかず嵐ケ丘へと自然とひきよせられていく，それをくもが巣を張って待つように，待ち構えていたのはヒースクリフで，こゝぞとばかりリントンを迎えに出す。

自信のない愛に魅力はない

何回目かに無理矢理に二人が逢わされている処であるが，

Linton did not appear to remember what she talked of; and he had

evidently great difficulty in sustaining any kind of conversation. His lack of interest in the subjects she started, and his equal incapacity to contribute to her entertainment, were so obvious that she could not conceal her disappointment. (Chapter XXV)

虚弱なリントンは何か会話をつないでいくのもやっとだし，話していることに興味は示さないし，キヤシイのもてなしをしようともしないで，キヤシイはがっかりしてしまう。

He glanced fearfully towards the Heights, begging she would remain another half-hour at Heights. (Chapter XXVI)

二人の様子を見張っているヒースクリフが居てはリントンは恐しくて仕方がない。ここはどうあってもキヤシイを引き止めておかぬばならぬと，「どうかもう三十分こゝに居て下さい。」と彼女に懇願するのだが，彼の態度に失望した彼女には彼のその弱々しい様子は訴えるものがない。自信のない愛には魅力はないのである。

見せかけの愛には魅力はない

"My affectation!" he murmured; "what are they? For heaven's sake, Catherine, don't look so angry! Despise wretch: I can't be scorned enough; but I'm too mean for your anger. (Chapter XXVII)

「僕のみせかけ，いゝじゃないか」とリントンはつぶやく，「後生だからそんなに怒った顔をしないでくれよ。いくじなしを笑ってくれ，だが怒らないでくれ」リントン側からはキヤシイの心を捉えることは出来ない。

"But my father threatened me," gasped the boy, clasping his attenuated fingers, "and I dread him." "Oh, well!" said Catherine. with scornful compassion, "keep your secret: I'm no coward. Save yourself: I'm not afraid!" (Chapter XXVII)

おやじに威赫されてみせかけだけの態度に出ているのならまだキヤシイには我慢が出来る，やっとのことで野原に腰を下ろしているリントンに同情も出来る。だが「おやじがおどすのでどうしようもないんだ」と云うに到っては我慢できない。

"Keep your secret to yourself." エミリーの大好きな言葉である。やたらとぐちを云うものではない，自分の秘密をやたらと人に云うものではない，毅然としたエミリーの態度は愛の姿の中にも見出される。真実からの感情の流露でなければ魅力はない，そしてあの有名な "I am no coward." のせりふとなる。"Save yourself" こゝに到ってはエミリーの真の姿が一杯に溢れている。男のような強さ，力強い胸打つ言葉である。弱音，泣きごと，くり言は身の破滅を導くだけである。「甘えないでし

っかりしなさい，私は恐れないわ」と彼女はリントンを叱りつける。

この二人はヒースクリフの策略でがんじがらめに束縛されて結婚を強いられるが弱いリントンはすぐに死んでしまう。

ではエミリーはどんな人物を用いてこの未完の愛を完成させたか，キヤサリンの兄ヒンドレーの息子ヘヤトンと夫リントンを失った後のキヤシイの結婚によって愛の完成の姿を見るのである。この二人を用いて完結へと導いたことに対しては種々な説がつけ加えられているが今はそれをさておき，この二人の愛の姿の中にも，なかなか微笑ましい又々エミリーの女であることを感じさせる場面が多々あるので，最後にそこをあたってみたい。

愛の技巧

ヒンドレーの死後のヘアトンはヒースクリフに育てられ読み書きも教えられることもなく唯逞しいだけの若者に成長していくが根の善良な彼は夫に死に別れた美しい若い未亡人キヤシイに同情を覚え，キヤシイも亦暇なまゝに徐々に彼に興味を覚えていく。しまいには彼女の方から積極的に彼の注意を惹きつけようとする。

心を砕くあたりなかなか興味つきないものがある。興味のありそうな本を開いたまま，さも読みたくなるようにテーブルの上に放り出しておく。これを彼女は幾度も繰り返えした。案の定ヘヤトンは徐々に本に心惹かれ読み方を教えて貰いたくて，キヤシイに近づく。

She returned to the hearth, and frankly extended her hand. He blackened and scowled like a thunder-cloud, and kept his fists resolutely clenched, and his gaze fixed on the ground. Catherine, by instinct, must have divined it was obdurate perversity, and not dislike, that promted this dogged conduct; (Chapter XXXII)

いろりの側に戻って来ると彼女は手をさし伸べた。彼は真赤になって雷雲のようになる，しっかりにぎりこぶしを握りしめ地面をじっと見つめている。キヤシイは本能的に相手の気持を読みとると，しばし一寸ためらうが，思い切ると彼の頬にやさしくそっとキスをしてやる。最初キヤサリンとヒースクリフがお互に愛を自覚し得なかった失敗をもう一度繰り返えしてはならないのである。始めは自覚し得なかった若すぎる二人の恋人を持って来て，今度は上手に相手の気持を見抜かせているところにエミリーの細い計算があるようで興味深い。

for, after remaining an instant undecided, she impressed on his

cheek a gentle kiss.

またキヤシイは一度結婚を経験した女性だけにその大胆さもちゃんと計算に入っているようである。リントンの態度を obdurate perversity と表現している処など実に巧みだ。情熱的だがつむじ曲りで素直にその情熱を表現出来ない若者らしい素朴さ。だが今度はその相手の愛情を上手に見抜いたキヤシイは

"Say you forgive me, Hareton, do? You can make me happy by speaking that little word, He muttered something inaudible. "And you'll be my friend?" added Catherine interrogatively.

(Chapter XXXII)

「ね，たった一言許すといって，それだけ云って下されば嬉しいわ。」もごもごと口ごもるヘヤトンの気持を充分に理解して「ぢゃお友達になって下さるわね」とたゝみかけるキヤシイは愛の技巧では母のキヤサリン，ヒースクリフよりはずっと上手(うわて)である。勿論ヘヤトン等足許にも及ばないがこのように女性の方からも積極的に自分の愛情を実に上手に云い表わす術を心得えているのも流石エミリーは女性作家である。

愛の極致は尊敬である。

The intimacy thus commenced, grew rapidly; though it encountered temporary interruptions. Earnshaw was not to be civilized with a wish, and my young lady was no philosopher, and no paragon of patience; but both their minds tending to the same point-- one loving and desiring to esteem, and the other loving and desiring to be esteemed-- they contrived in the end to reach it. (Chapter XXXII)

二人はかくして急速に親しくなりたまにはとぎれたこともあるが，アーンヨーは時々気持の上でせっかちになったり，待てない気分になったりもし，キヤシーも唯辛抱強いだけの聖者のような人間ではないので時々中断もありましたが，同じ目的に向ってすゝみました。一人は愛し尊敬することを願い一人は愛され尊敬されることを願っていましたので二人ともがその点に到達するように努力致しました。愛の極知は尊敬である。最後に到ってエミリーが声を大にして強張したいのはこの愛の精神であろう。

The crown of all my wishes will be the union of those two. I shall envy no one on their wedding-day: there won't be a happier woman than myself in England! (Chapter XXXII)

「私の最大の願はこの二人の結婚であります。お二人の結婚式の日にはもう私は地上の

他の誰をも羨むことは致しますまい。げに私はこの英国中で一番幸福な女であります。」とネリーがロックウッドに云っている言葉をこゝに到って始めて愛の完成をみた歓びのものと解したい。ロックウッドも云っている。

They do live more in earnest, more in themselves, and less in surface, change, and frivolous external things. I could fancy love for life here almost possible; and I was a fixed unbeliever in any love of a year's standing. (Chapter VII)

この外界の出来ごとにわずらわされることなく自分に真面目に生きるこの地方の人々の間には，一生に続く愛ということも考えられるようだ。愛が一年も続くなんて思はなかったのだがと。この純朴な田舎の人達の間に永遠に続く愛を描いてみようとしたエミリーの意図も充分にうなづける。

このように愛の演出のうまさに驚かされ乍ら一方にはエミリーの徹底した愛の追及の仕方にも敬服させられるのである。

この物語に於いてヒースクリフがキヤサリン亡きあと十八年間も彼女の幻を追い乍ら歓喜に溢れて死ぬ筋も彼の心の中にある愛の完成と考えてよかろうが，形の上で完成しなかった愛の姿にはエミリーは満足出来なかった。矢張り結婚という形をとって愛の完成の姿を見たかった。ヒースクリフとキヤサリンとの自覚しなかった愛，次にせめて二人の子供を結婚させてと結ばせたリントン，キヤシイの結婚この失敗に終った結婚についでヘヤトン，キヤシイの結婚のように始めて愛を自覚して結婚に到る完成の姿を見ようとするところに，エミリーの女の執念ともいうべきものが感じられるのであって愛のないところに完成はないとのエミリーの強い信念がうかがえるのである。

愛の極致は尊敬である。その点

The world of the novel is divided into two rival camps of Edgar and Heathcliff. Thrushcross Grange and Wuthering Heights. (4)

スラッシユクロス屋敷と嵐ケ丘，静と動との全く異る二つの世界を結ぶのがヘヤトンキヤシイの結婚の意義であるととる Robert. C. Mckibben とは私は少々解釈を異にしているわけである。だが彼女の文体，構想，物語の筋に絶大の賞讃を喝した David Cecil の

Style, structure, narrative, there is no aspect of Emily Bronte's craft which does not brilliantly exhibit her genius. The form of Wuthering Heihgts is as consummate as its subject is sublime. So far from being the incoherent outpouring of an undisciplined imagination, it is the one perfect work of art amid all the vast

varied canvasses of Victorian fiction. (5)

言には私も全面的の賛成を唱えエミリー，ブロンテに最大のかっさいを贈ってこの小論を終るものであります。

(1) 研究社英文学叢書「嵐ケ丘」序文　豊田　実博士

(2) Critics on Emily Brontë by Judith O'neill

(3) Tempest　Act IV　Scene 1

(4) The Image of the Book in Wuthering Heights
by Robert C. Mckgbben.

(5) Early Victorian Novelists by David Cecil